

第10回 生物多様性って？ COP10 開催直前！

パナソニック提供龍谷講座 in 大阪
～今、あなたに知ってほしい世界の現実～
2010年度 社会貢献・国際協力入門講座

日時 9月8日(水)午後7時～8時30分
会場 龍谷大学大阪梅田キャンパス研修室
講師 宮川 五十雄 生物多様性かんさい代表世話人/森の都研究所代表
(「生物多様性かんさい」<http://sites.google.com/site/kansaibiod/>)
(ブログ「森からの贈り物」<http://ameblo.jp/forestcity/>)

後期がスタートしました。後期の初回は、宮川五十雄さんに講師を務めていただきました。生物多様性が減少している原因は汚染や過剰な資源開発だけではなく、開発途上国の貧困とも深く関連していること、日本や関西から生物多様性を保全するためにできることなどを学びました。



CBD-COP10 (CBD コップテン) とは？

「CBD - COP10」とは、今年10月に名古屋で開催される「第10回生物多様性条約締約国会議」のことです。この生物多様性条約は、元々、1992年にリオデジャネイロの地球環境サミットで提案され締約されました。それと同時に、気候変動枠組み条約(UNFCCC)も締約され、これら二つの条約は未解決の様々な環境問題を網羅していることから、大変重要視されています。世界191カ国とEUが加盟しており、国連加盟国で加盟していないのは、アメリカ合衆国、バチカン、アンドラの3国のみです。なぜCBDの加盟国が多いかは、すべての国、市民に関わるテーマ、生物多様性を扱う条約だからということに加え、環境だけでなく、各国の経済的利害に深く関わる条約だ、という側面もあります。

CBD-COP10で議論される大きなテーマは以下の5つです。

1. 生物多様性の急激な減少をいかに食い止めるか(森林、海洋、淡水域が抱える生物多様性の減少について)
2. 気候変動と生物多様性(二つの条約を統合的に議論する)
3. 貧困と開発、人権(南北問題について)
4. 食と農(遺伝子組み換えと、世界食糧危機について)
5. 生物多様性資源へのアクセスと利益の公平な配分(次ページの“生物多様性と貧困の深い関わり”を参照)

生物多様性とは？

生物多様性は、科学的な視点より以下の3つの定義で説明できます。

- ・「種の多様性」異なる種が多く存在(約170万種)。毎年約1万種の新種を発見。
他の生き物と「全く無関係」な生き物は見つかっていない。
- ・「生態系の多様性」異なる気候、地質、(地域の自然や生物間の)歴史などの影響で、生態系が多様であること。
- ・「遺伝子の多様性」同じ種(しゅ)の中に蓄積されている、遺伝子タイプの多様性。

CBD-COP10では、自然界の遺伝子の多様性の喪失と、多様な伝統作物の絶滅の両方が課題とされています。

生態系を保全し生物多様性を守ることは、人類に多大な利益をもたらします。*1 しかし、利益以前に、生物多様性とは約40億年にわたって生命を継承してきた営みである、ということが大切なのです。生物を保全することは、生物の種類が減少しないように努めるという認識だけでいいのでしょうか？ 減少しないから良い、ということではないはずです。これからの時代にも、これまでのように、多様な生き物が誕生するだけの豊かな自然を保ち続けられるかどうか、ということを考えることが重要です。

なぜ「2010年目標」は失敗したのか？

『地球規模生物多様性概況 (GB03)』*2 という報告書があります。そこには「『2010年目標』(2010年までに、生物多様性の損失スピードを顕著に緩和する)は、あらゆる側面で失敗した」と記載されています。一部の地域の熱帯雨林やマングローブでは、保全対策がすばらしい効果を挙げましたが、その他の様々な生息地ではそうではありませんでした。日本について同時に公表された「生物多様性総合評価」*3でも、「人間活動にともなうわが国の生物多様性の損失は全ての生態系に及んでおり、全体的にみれば損失は今も続いている」と結論付けられています。陸水生態系(河川や湖など)、沿岸・海洋生態系、島嶼生態系(小笠原や沖縄など)での損失が顕著です。

なぜ「2010年目標」が失敗したのかについては『地球規模生物多様性概況3』のレポートで以下の5点が述べられています。

- ・生息地の改変
- ・過剰な土地利用、資源開発
- ・汚染
- ・侵略的外来種
- ・気候変動

特に開発途上国では法整備も不十分で、生物多様性の減少が加速しています。加えて、技術、資金力のあるはずの先進国でも、生物多様性の損失スピードを顕著に減速させた国はありません。その原因としては、「2010年目標」に厳罰規定がなかったということが挙げられますが、罰則以前にわたしたちの倫理観が働いているのかどうかということも大事な視点です。情報社会の先進国ですら、生物多様性の損失について市民レベルで危機感を共有できていないのでは、と宮川さんは考えます。

生物多様性と貧困の深い関わり

最も生物多様性の高い地域が最も貧困に苦しむ地域でもある、という構図があります。開発途上国では、樹木、魚など天然資源の過剰採取、大面積の農地開発、鉱山開発、人口爆発が起こっています。それらは生態系の許容量を超えて破壊的圧力となり、その結果として気候が不安定化し、砂漠化、洪水などが起こります。すると、人々の収入が不安定となり貧困人口が拡大し、ますます天然資源の過剰採取や過度の開発が増える、という悪循環に陥ります。その責任の一部は、開発途上国の資源や農地を大規模で利用する先進国側にもあります。

貧困を解決しなければ開発途上国の生物多様性の損失スピードは決して減速しない、という観点から、南北の貧富の差をいかに解消するか、というのも今回の国際会議の重要な論点とされています。その中で、救世主のひとつと考えられているのが「生物多様性資源」という考え方です。新薬や新たな食材、資材の候補となる未知の多様性資源が注目を浴びています。ここで重要となるのが、先進国だけが儲けるのではなく、「利益を公平に配分する」ということです。貧困の解決と、生物多様性の保全の両立をはかるには、医薬品や食品の高度な技術を持つ先進国と、天然資源を持つ開発途上国の間で、公正・公平な契約が必要となり、このことは今回のCOP10でも議論される予定です。

わたしたちが日本、関西からできることは？

世界34ヵ所の生物多様性ホットスポット(地球規模での生物多様性が高いにも関わらず、破壊の危機に瀕している地域のこと)に、日本列島は丸々含まれています。豊かな自然や生物多様性の衰退は、関西地域でも急速に進行しているのです。わたしたちに求められるものは、「地域(関西や日本)での生物多様性保全と世界の生物保全を同時に考え、行動するバランス感覚ではないか」、と宮川さんは指摘されました。

*1 詳細は「平成19年度図でみる環境/循環白書」を参照

<http://www.env.go.jp/policy/hakusyo/zu/h19/html/vk0701020100.html>

*2 「地球規模生物多様性概況」(GB03 Global Biodiversity Outlook 3) <http://gbo3.cbd.int/>

*3 「生物多様性総合評価」 <http://www.biodic.go.jp/biodiversity/jbo/jbo/index.html>